

土壌汚染分野における HYDRUSの活用の可能性について

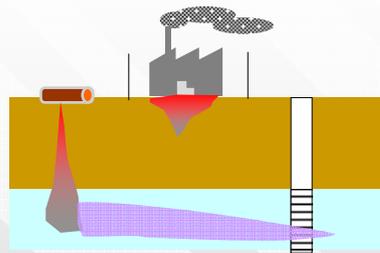
- 1.土壌汚染に関する最近の動向
- 2.HYDRUSを用いた地下水汚染発生リスク評価
現場で得られるデータを用いた評価
(京都大学との共同研究)

保高 徹生
国際航業株式会社
地盤環境エンジニアリング事業部

2007-10-14 (Sun)

市街地の土壌汚染

汚染の原因



対象となる汚染物質

基準がある物質

重金属類

農薬類

ダイオキシン&PCB類

揮発性有機化合物

基準がない物質

油

小

移動性

大

最近の動向

土壌汚染の調査が必要なサイト数：約90万サイト

(土壌環境センター(2002))

実際に調査されているサイト：2万サイト弱(想定)

調査・浄化費用：13兆円程度(土壌環境センター(2002))

2003年：土壌汚染対策法が施行 明確な基準が設定

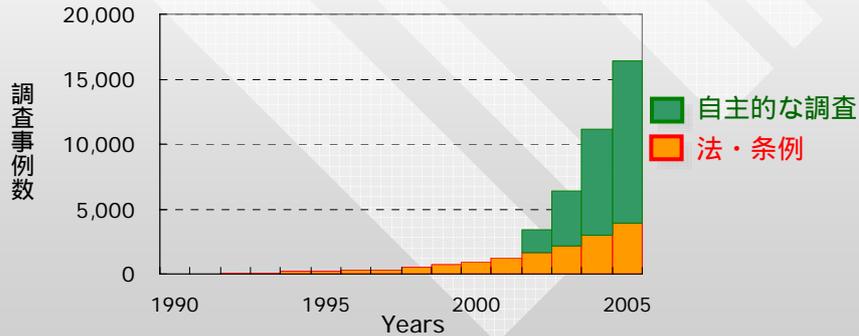
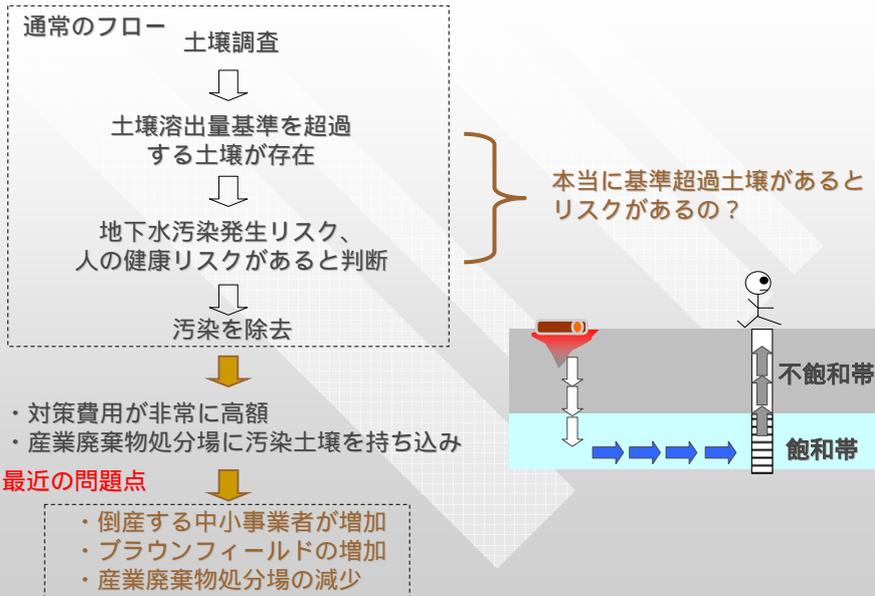


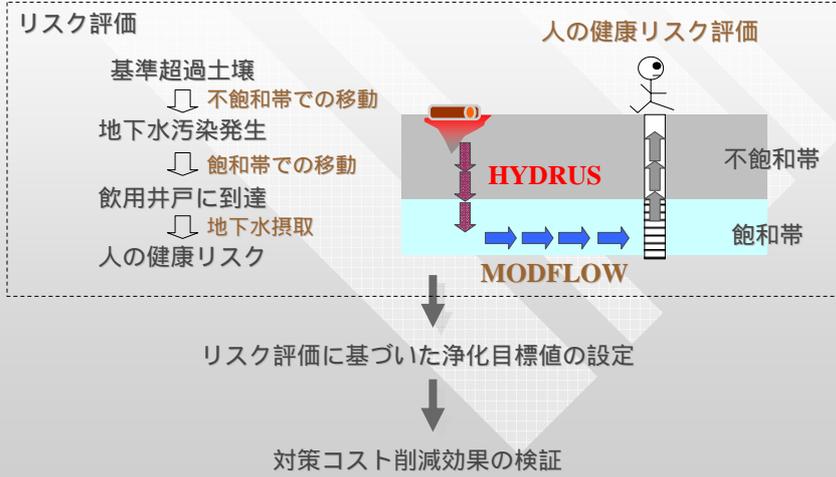
図 土壌汚染調査数(環境省(2007)、土壌環境センター(2007)より筆者作成)

土壌汚染分野での最近の問題点

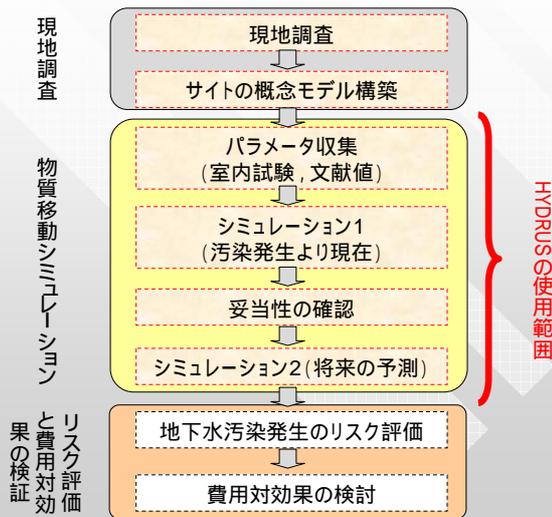


検討してきた解決策 リスクに基づく土壌汚染管理

基準超過土壌 人の健康リスク・地下水汚染発生リスク

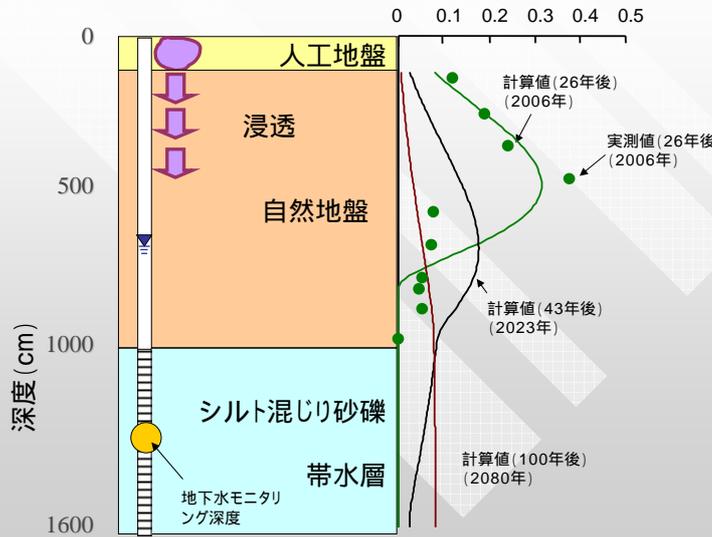


土壌汚染分野でのHYDRUSの活用事例 土壌汚染サイトにおける将来の地下水汚染発生リスクの予測



土壌中の濃度のシミュレーション結果

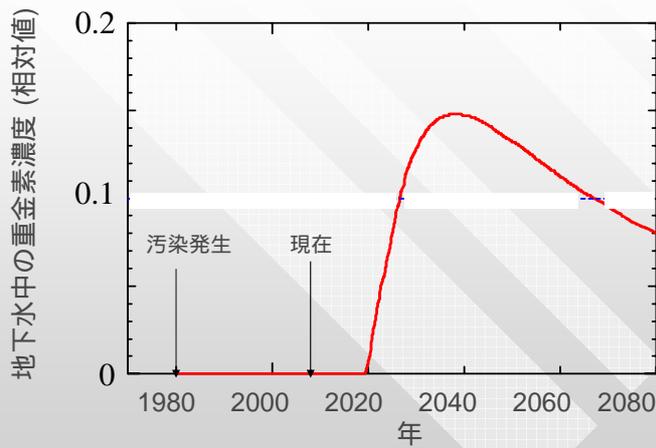
溶出試験における土壌中の重金属濃度 (相対値)



2007/10/14 (SUM)

国際航業株式会社 地盤環境エンジニアリング事業部

土壌汚染分野でのHYDRUSの活用方法

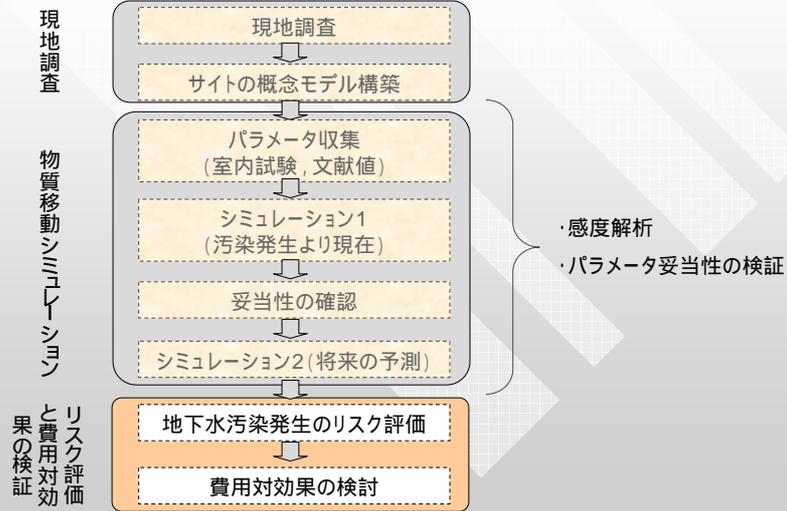


地下水中の重金属濃度 の経年変化

2007/10/14 (SUM)

国際航業株式会社 地盤環境エンジニアリング事業部

今後は？



ありがとうございました。